

平城宮第一次大極殿院 回廊基壇の復原

はじめに 平城宮第一次大極殿院は、立体感のある地形に特徴がある。だがそれは同時に、旧地形が改変を受けやすいことをも意味し、とりわけ創建当初の回廊は遺構の残存状況が悪く、その復原も困難を極める。そのため、これまでに試みられている回廊の復原案は根拠が乏しく、かつ遺構との矛盾も解決されないままに残されていた。本稿ではこうした矛盾点を解消しうる復原の根拠として、恭仁京への遷都後に大極殿院地区の遮蔽装置としてつくられた掘立の一本柱塀SA3777の遺構に注目し、そこから遡って創建期築地回廊の復原を試みる。

回廊の遺構と既往の復原案 第一次大極殿院回廊の遺構変遷は、『平城報告XI』（奈文研1982。以下第一次大極殿院の時期変遷はこの学報に従う）において初めて提示された（図31）。まず平城宮造営当初に複廊の築地回廊として創建された（I-1期）。次いで南面回廊の一部を毀して東西楼閣を造るI-2期を経て、I-3期には恭仁京への遷都に伴い大極殿および東西回廊が移築されたが、遷都後もこの地区は使い続けられ、東西を遮蔽するために掘立の一本柱塀が東西旧回廊の外側柱列に設けられた。その後I-4期、Ⅱ期、Ⅲ期と、三度にわたり区画施設が改作されたため、I-1期回廊の遺構は激しく削平された。I-1期回廊の残存遺構は、南半部では雨落溝、基壇化粧抜取、礎石抜取とその根石が検出されているが、地形が高まる北半部では広場側の雨落溝しか検出されていない。

大極殿院全体の地形および東面・西面回廊の桁行方向断面についての復原考察は、1993年度の第一次大極殿院1/100模型作成に伴う復原案によって具体化された。ここでは東面・西面回廊基壇の桁行方向断面を、広場および磚積擁壁上の地形と平行とし、擁壁上下における回廊基壇の標高差は、磚積斜道と平行に回廊基壇を走らせることで解消している。

しかし、東面回廊西雨落溝の検出遺構は斜道の復原面より高い位置で、かつ斜道よりも緩い傾斜で検出されているため、矛盾が生じている。また、斜道対応位置の回廊基壇の傾斜がきつく、この箇所の回廊の上部構造が複雑となる。以上、回廊基壇上面の標高の復原と、回廊と斜道の取り付け方の解釈が課題として残されていた。

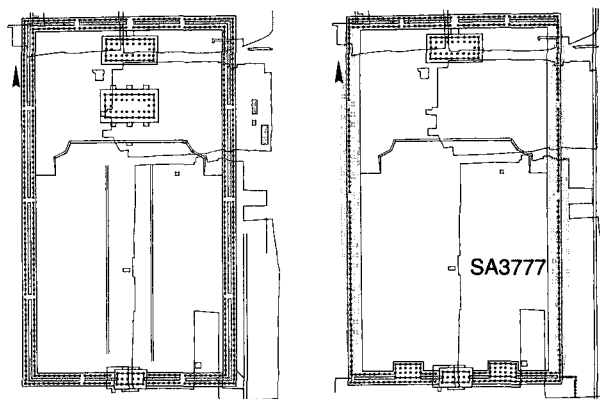


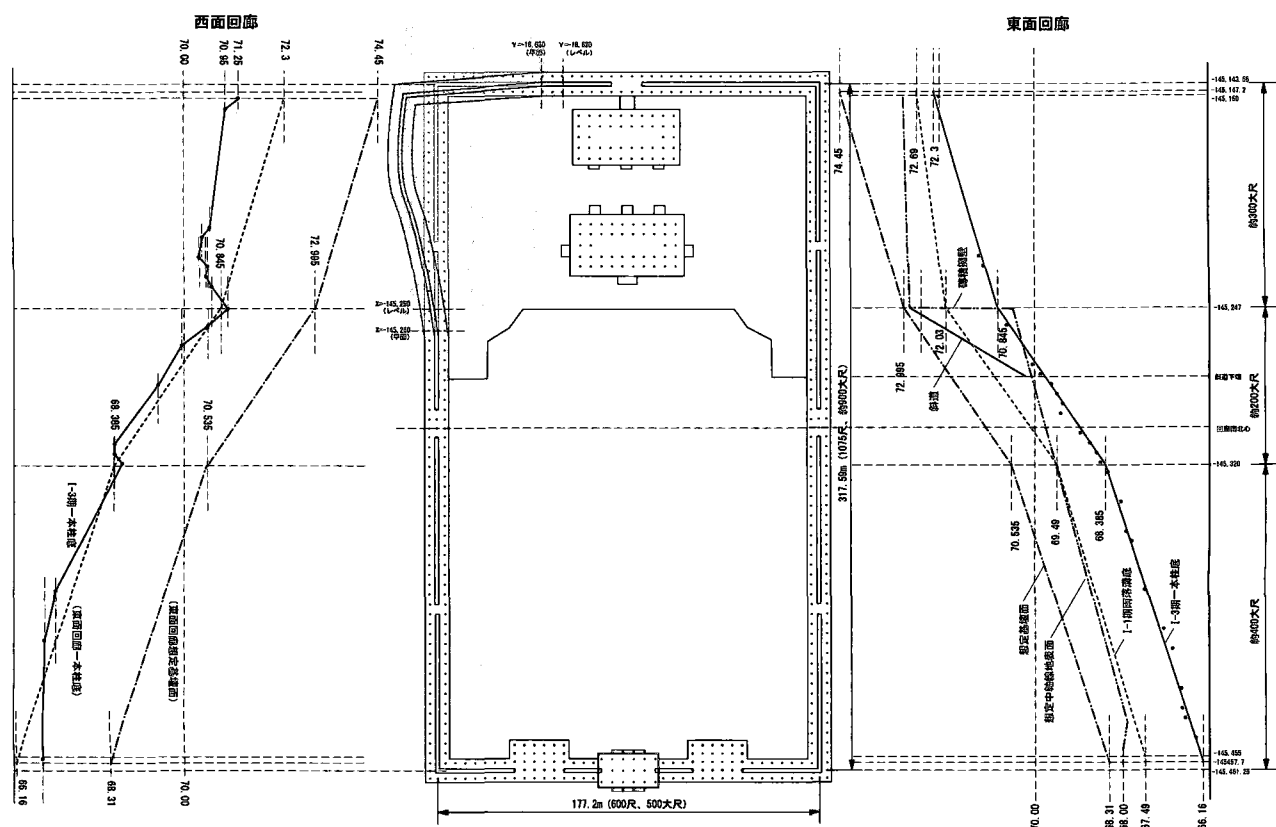
図31 第一次大極殿院の遺構変遷（左：I-1期、右：I-3期）

院西北隅部の問題 I-1期回廊の遺構自体の問題として、西面回廊北半部の遺構および北面回廊西半部の遺構が、大極殿院東半部の遺構を中央軸で折り返した場合の対称位置から西および南に振れ、かつ標高も落ち込んでいることがあげられる（図32左図）。平城宮第295次、第305次調査により、大極殿院西北隅部には平城遷都以前には谷筋が入っており、宮造営に伴って大量の盛土をしたことが判明し、この落ち込みおよび振れが意図的につくられたものかどうかの問題となった。意図的だとすれば、院全体が非対称となるうえ、北面回廊に至っては東西で柱間寸法が異なることとなり、建築的にも不自然である。

そこで、本来は東西対称に造成されたが、この盛土部分が長期的なクリープ（一定荷重による継続的変形）により、沈下しつつ南西へ動いたとの仮説を立て、大極殿院西北隅部の地盤のボーリング調査を委託によりおこなった。結果、標準貫入試験の値が0に近い軟弱土層が宮造成時の盛土の下半部にあるばかりか、その下層の自然堆積土中にも同様の軟弱土層があり、合わせて最大7mの厚みに達することが判明した。しかもその分布範囲が、西面回廊および北面回廊の遺構がずれを生じている範囲とほぼ一致することもわかった（図32中央図アミ部分）。この状況からすると、当該地盤がクリープを起こした可能性が十分に考えられ、当初は平面形、地盤とも左右対称で計画、施工されたものと想定できる。

復原の方法と考察 以上の前提に対して、以下の3つの方法によって復原を試みる。

- ①東面回廊I-3期一本柱塀穴底標高値から、I-1期築地回廊の基壇上面標高値を復原
- ②東面回廊I-1期西雨落溝と①から、I-1期築地回廊の基壇高を復原
- ③東面回廊I-1期西雨落溝と広場・斜道の地形との間に生じる齟齬の解消方法の考察



①まず、I-3 期一本柱塀の遺構が I-1 期築地回廊復元の根拠となる理由を考察しておこう。大極殿および東西回廊の恭仁京への移築に際して、東面・西面回廊が掘立の一本柱塀に改造されたが、南面・北面回廊には掘立柱の痕跡がなく、築地回廊のまま残されたとみられる。一本柱塀の地表面は南面・北面回廊の残存基壇に規定されることとなるから、前身の東面・西面築地回廊基壇から大きな改造を受けたとは考えにくい。

東面回廊Ⅰ-3期一本柱塀の全柱穴底の標高値を検討してみると、全長約900大尺（1大尺=0.3545m）のうち、南から約900大尺、600大尺の地点に折点を持つ折線となる傾向を示す（図32右図赤実線）。各々400、200、300大尺の長さにより北方向へ一定の傾斜で上っていることから、傾斜した地表面に一定の深さで柱穴を掘ったと考えるのが自然であろう。するとⅠ-3期一本柱塀の地表面は、穴底標高値を結んだ折線と平行な面として復原できる。また東面回廊西雨落溝底標高値は（図32右図赤破線）、磚積擁壁以南では南から400大尺ほどの地点に折点を持つ折線となり、しかも一本柱塀穴底標高値の折線とほぼ平行に通るため、両者に関連があることは明らかである。

以上より、一本柱塀の遺構は築地回廊基壇復原の根拠となるといえよう。

築地回廊基壇上面は一本柱塀時の地表面と同一ないしは平行な面と考えうるので、築地回廊基壇上面は、一本柱塀穴底標高値を結んだ折線を、ある高さ分、平行移動することで復原されることとなる。基壇の標高は、東面築地回廊西側柱列の南端柱の礎石根石標高値67.71mを基準として推定できる。礎石のせい（厚み）を0.6mと仮定し、礎石天端を基壇上面と同一とみなすと、この位置での基壇上面標高値は68.31mと復原される。すると一本柱塀穴底標高値66.16mから礎石上面までの標高差は2.15mとなり、築地回廊基壇上面は一本柱塀穴底標高値の折線を上に2.15m平行移動した面となる（図32右図黒一点鎖線）。

② I-1 期東面築地回廊の西雨落溝が断続的にはあれ検出されているので、①で得られた築地回廊基壇上面との標高差から回廊基壇高が復原できる。回廊基壇高は磚積擁壁を境として南と北とで傾向を異にする。磚積擁壁以南では、雨落溝遺構が回廊基壇とほぼ平行に通るので、回廊基壇高は一定の0.77mとなる。擁壁以北では、

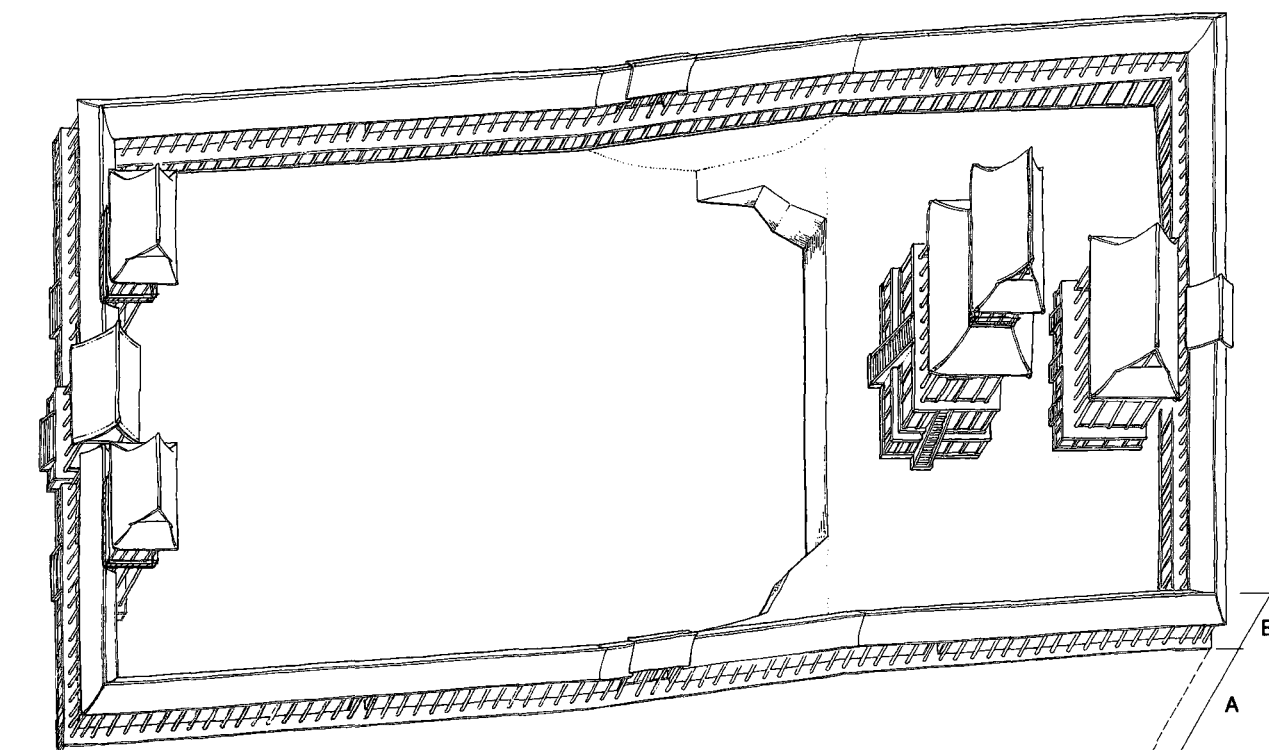


図33 第一次大極殿院復原案アクソノメトリック（高さ方向の寸法は平面寸法に対し、A（各基壇と磚積擁壁）：5倍、B'（各建物）：2倍で表現）

遺構の残存状況が悪いが、斜道上端部で検出された雨落溝遺構と北面回廊南雨落溝東端部の遺構の標高値を結ぶことで、この間の雨落溝傾斜が復原できる。その傾斜は①で得られたⅠ-Ⅰ期回廊基壇の勾配より緩く、磚積擁壁以北では回廊基壇が北に行くほど高まることになる。

③回廊雨落溝の遺構は、回廊基壇と広場との境界となり、両者の取り合い関係を示す根拠となる。広場側の地形は、大極殿院中軸線上の地形、斜道の傾斜、回廊雨落溝傾斜からおおよそ復原することができる。中軸線上標高値を見ると（図32右図黒二点鎖線）、磚積擁壁以南はおおよそ東面回廊雨落溝と同一の標高、傾斜で緩やかに上がっており、単純な北上がりの斜面であることがわかる。擁壁以北では傾斜が緩いが、雨落溝傾斜と大きくは違っておらず、大極殿を中心として東西南の三方に緩やかに下がる地形であっただろう。問題は斜道部分で、雨落溝傾斜と斜道傾斜とに大きな差があるため、回廊基壇とは別に、雨落溝と広場との間に最大0.8mの高さを持つ三角形の段差が出来ることになる。この点について遺構を再検討したところ、東西ともに斜道上面の回廊寄り部分に亀腹状の礫敷傾斜面があり、しかもこの傾斜面は斜道

南端よりも南へ延びていることがわかった。この礫敷傾斜面を斜道の傾斜と回廊基壇の傾斜の差の緩衝のための仕事と解釈すれば、以上述べてきた回廊基壇、雨落溝、斜道、広場の各標高間の矛盾を解消することができる。
復原案 以上の考察から、大極殿院の回廊と広場の地形は、図33のように復原することができる。この復原案では次の二点が特に注目される。一つは磚積擁壁以北の回廊基壇高の問題で、東面回廊基壇は擁壁位置から北に向かって徐々に高さを増し、大極殿院東北隅部では約1.7mの基壇高を持つこととなる。西面回廊も同様であるため、北面築地回廊は全長にわたって約1.7mの高い基壇をもつ建物となる。つまり、南から見ると、磚積擁壁、大極殿と並んだ背後に、高い基壇を持つ回廊がスクリーン状に立ち上がることになる。

もう一つは斜道の造形で、亀腹状礫敷き傾斜面を想定すると、礫敷きの分だけ斜道部分の幅が狭まることになる。礫敷きの幅は約9.5m、斜道の幅は約7.5mとなる。

ともに造形上の印象を大きく変え、大極殿院の景観、そして斜道の機能を考える上で無視しえない影響を及ぼすこととなろう。（清水重敦・長尾充・平澤麻衣子・中島義晴）